

## 2007年6月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500 hPa 高度では、北極海やグリーンランド南方で顕著な正偏差が見られた。一方、西シベリアでは負偏差、中国東北区では正偏差が顕著に見られた。これはシベリアで寒帯前線ジェットが平年よりも強かったことに対応している。ユーラシア大陸の中緯度帯では、中旬後半以降、中央アジアから日本付近、北太平洋にかけて準定常ロスビー波の波束伝播が見られ、対応する波列が明瞭となった。海面気圧で見ると、極域で正偏差、ヨーロッパからシベリア北部に負偏差が分布した。太平洋高気圧は日本の南東海上で平年よりも弱く、亜熱帯ジェットは日本付近で平年よりも南偏していた。また寒帯前線ジェットが明瞭で亜熱帯ジェットが南偏しており、ダブルジェット（寒帯前線ジェットと亜熱帯ジェットがともに明瞭な状態）が明瞭だった。

インド洋では、ベンガル湾の対流活動は平年より不活発だった。一方、アラビア海では非常に活発だった。この対流活動の偏差に伴い、上層のチベット高気圧は西偏した。太平洋熱帯域の対流活動は、海洋大陸付近を除いて不活発だった。オーストラリア北東部の外向き長波放射量（OLR）の負偏差が顕著で、これは前線の活動が活発だったことに対応している。赤道季節内振動（MJO）の対流活発な位相は、上旬から中旬にはインド洋西部を、下旬にはインド洋東部から

海洋大陸を東進した。これに対応して、下旬以降、ベンガル湾や南シナ海において対流活動が活発化した。太平洋赤道域下層では、太平洋の亜熱帯高気圧が平年よりも強かったこと、MJOの対流活発な位相に伴う下層の収束域がインド洋から海洋大陸上にあったことなどから、西部から東部まで東風偏差が卓越した。

南方振動指数（SOI）は+0.5となった。

### 世界の天候

世界の月平均地上気温平年差は、+0.24°Cで、1891年の統計開始以来、7番目に高い値となった。

東アジアやヨーロッパの広い範囲で異常高温となった。

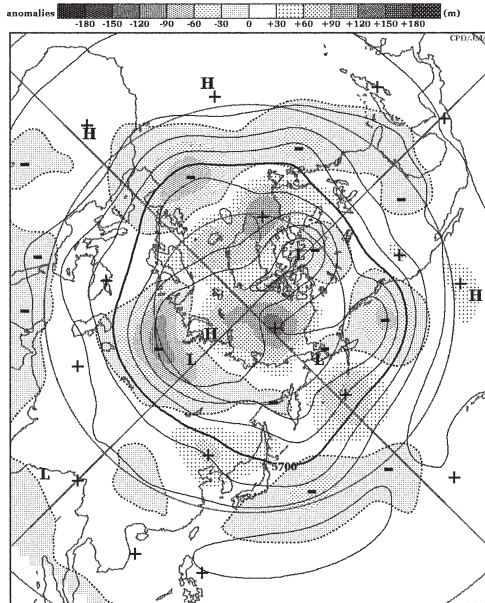
○オーストラリアでは、南極方面から寒気が入り、広範囲で異常低温となった。この寒気を伴う南風と貿易風の収束域に当たる北部で異常多雨となった。

○アラビア海では対流活動が活発で、オマーンやパキスタンなどでサイクロンや大雨の被害が伝えられた。

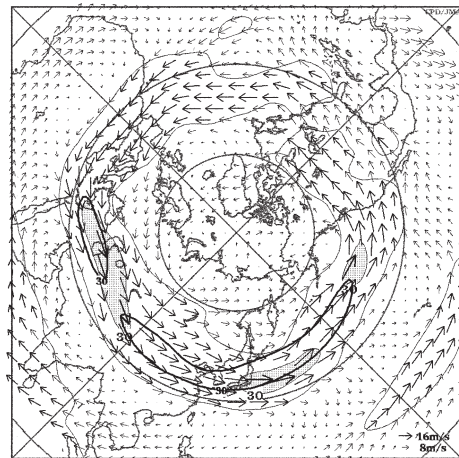
（気象庁地球環境・海洋部気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>

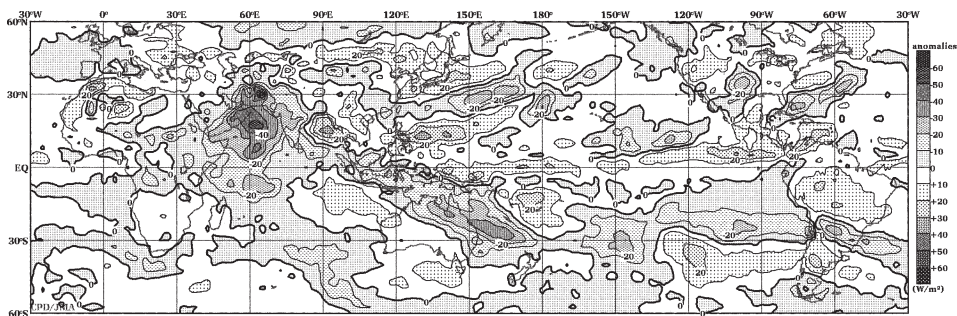


2007年6月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差  
等値線間隔は60 m, 陰影は平年偏差。平年値は1979~2004年のデータから作成。



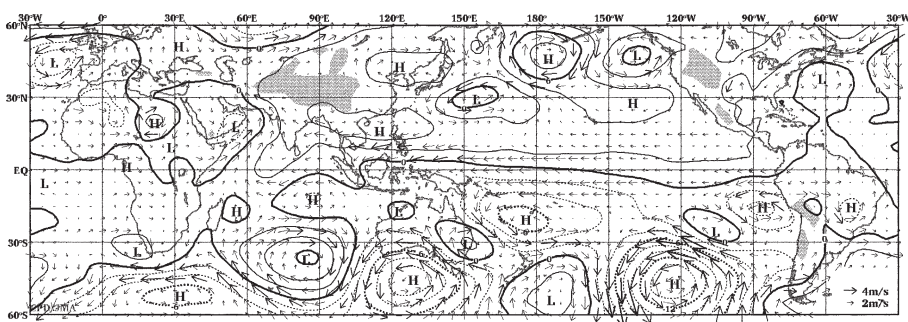
2007年6月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

等値線間隔は15 m/s. 陰影部は30 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~2004年のデータから作成。



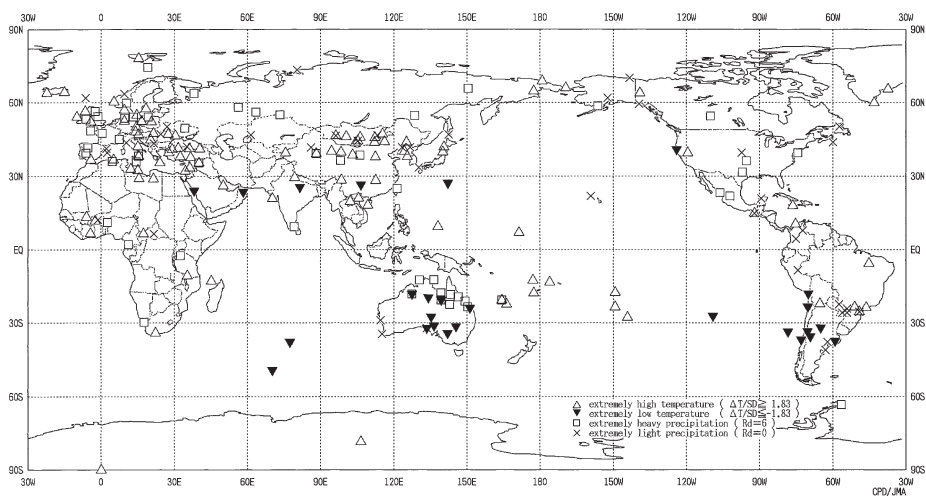
2007年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は  $10 \text{ W/m}^2$  で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA、年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2007年6月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2007年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。